

猫の腎臓における白血病性変化

名古屋大学環境医学研究所出題 第8回獣医病理学研修会 標本 No. 115



猫，5才♂雑種，黒虎。昭和42年10月13日左下腹に硬いものにふれ，軟便が続いたので開業獣医師を尋ねる。

臨床上，可視粘膜蒼白，被毛光沢なし。食慾はなく水を少々飲む。体温は 41.5°C ，脉膊150，呼吸は正常，回虫卵陽性。3日間，クロロマイセチン，ストレプトマイシンを与えたところ恢復に向つたという。同年11月10日再度，元氣喪失し，軟便がつづくので開業医師を尋ねる。腹部触診により，脾臓肝臓の腫大に気づく。可視粘膜，口唇黄疸色，13日皮膚に黄疸をみとめる。食慾なく，水のみを飲む。14日歩行困難となる。20日試験開腹すると，肝，脾の腫大を認める。同日死。

剖検所見。脾臓は正常の大きさの約2倍，血量に富む。肝臓は黄疸をみとめて腫大す。表面は平滑，処々に小出血あり。縦隔洞淋巴腺が5倍に腫大。腎臓は腫大し，被膜の剝離容易，被膜下に大豆大，あるいは小豆大の膨隆した灰白色の腫瘍結節あり。剖面他の組織とは明瞭に区

別できる。

組織学的所見

腎臓，腫瘍組織は間質を介して排圧性に増生し，肉眼的に大きな結節となつた部位には，処々に取り残された糸球体や細尿管をみとめる。取り残された糸球体では髄はあるものは肥厚している。糸球体，上皮細胞はこわされて濃縮している。また残された細尿管上皮細胞は膨化し変性が強い。内腔は認められない。ところにより破壊されて壊死するものもある。腫瘍細胞はいくらか大小があり，核はH Xで濃く染り，中央にあり，大きく，原形質に乏しい。なお比較的大きな腫瘍細胞には赤い大きな滴状の粒子をみとめる。この細胞からこの腎臓は白血病を疑う。

脾臓は被膜は薄く，濾胞は不鮮明であるが，脾髄には細胞を増し，莢膜内の血管にはいわゆる白血球細胞の集積をみとめた。